

頭書  
五百巻

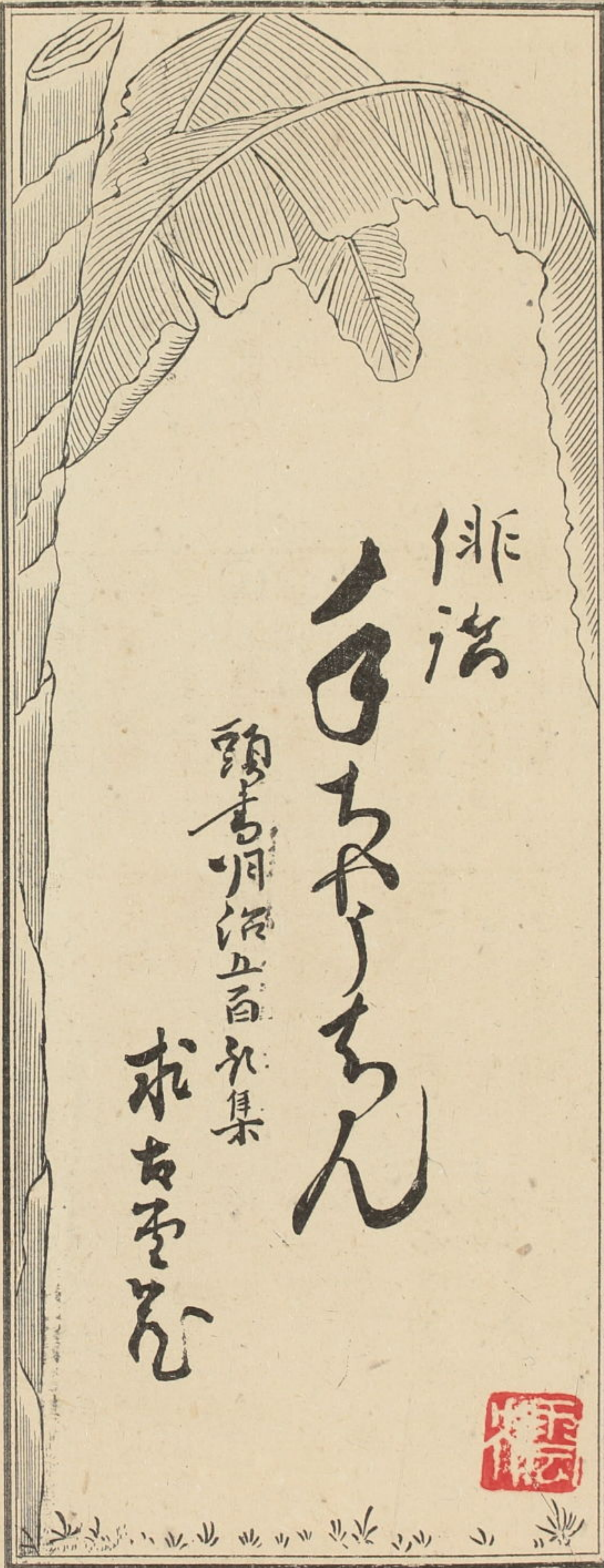
俳諧手提籠

全



# 卷中目錄

- ① 發句切字
- ② 切字ありぬ分
- ③ 切字波句
- ④ 俳諧聯句
- ⑤ 表六句
- ⑥ 不易流行
- ⑦ 曲節地 直行艸
- ⑧ 趣句句作の事
- ⑨ 上名人の事
- ⑩ 雅俗の事
- ⑪ 温古知新
- ⑫ 切字の事
- ⑬ 扱雜發句
- ⑭ 第 三
- ⑮ 四句目
- ⑯ 筆句の事
- ⑰ 月花 花紅葉
- ⑱ 附句の事
- ⑲ 附方八体
- ⑳ 句の変化
- ㉑ 表句裏句
- ㉒ 古池の聞様
- ㉓ 神祇の詞
- ㉔ 尺教の詞
- ㉕ 意の詞
- ㉖ 無常の詞
- ㉗ 迷懷の詞
- ㉘ 人倫の詞
- ㉙ 居所の詞
- ㉚ 山類の詞
- ㉛ 水辺の詞
- ㉜ 季 よからざるの詞
- ㉝ 月花 下のの詞
- ㉞ 春 春の詞
- ㉟ 會式の事



俳諧

百ちりちん

頭書明治五百年集

求古を心



新撰明治五百題

春風を尊ぶ

一月	羊の花	福日	福馬	福鶏
一月の花といふやぬを福の香	あつむけは春風を尊ぶとての心	あつむけは春風を尊ぶとての心	あつむけは春風を尊ぶとての心	あつむけは春風を尊ぶとての心
柳史	山月	有終	山月	山月

俳諧を施す序

冠五言

道志をやは  
いその神  
そのうこの  
四方山を  
横あふる  
そも思ふ  
身を思ふ  
身を思ふ  
身を思ふ  
身を思ふ

同

山つらむ  
暁  
山  
山  
山  
山  
山  
山  
山  
山

同

ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら

同

ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら

一日	新年	福水	年旦	年朝	嫁君	芋の夜	福空
一日は西や時文日中橋	一日は西や時文日中橋	一日は西や時文日中橋	一日は西や時文日中橋	一日は西や時文日中橋	一日は西や時文日中橋	一日は西や時文日中橋	一日は西や時文日中橋
林南	斗月	山月	山月	山月	山月	山月	山月

同

ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら

同

ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら  
ああうら







花	山	梅	新	本	修	福	七
花吹	山吹	梅	梅	本	修	福	七
花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき 花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき	花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき 花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき	花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき 花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき	花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき 花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき	花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき 花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき	花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき 花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき	花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき 花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき	花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき 花吹の夜や沈むる暮上り 山吹や折る夕暮きつと 山吹や昔はりのあつりき

一 發句切字 和歌の切字と混じりて

花吹の夜や沈むる暮上り  
山吹や折る夕暮きつと  
山吹や昔はりのあつりき  
花吹の夜や沈むる暮上り  
山吹や折る夕暮きつと  
山吹や昔はりのあつりき

花吹の夜や沈むる暮上り  
山吹や折る夕暮きつと  
山吹や昔はりのあつりき  
花吹の夜や沈むる暮上り  
山吹や折る夕暮きつと  
山吹や昔はりのあつりき

花吹の夜や沈むる暮上り  
山吹や折る夕暮きつと  
山吹や昔はりのあつりき  
花吹の夜や沈むる暮上り  
山吹や折る夕暮きつと  
山吹や昔はりのあつりき















福 謝 九柴  
故 性 千車  
故 性 山月  
田 性 山月  
子 苗 山月  
河 骨 山月  
牡 丹 山月

暮 田 蒼杜  
暮 田 永棧  
推 の 名 初来  
給 之 名 新志  
肩 給 之 名 山月  
意 肩 山月  
日 年 山月

い く 子 を り せ ろ い づ つ ち ん き 子 世 嘗  
い り 瓜 の 花 衣 け ら ち り 志 進 子  
い う 又 之 の 目 子 著 能 け ら 小 空 河  
い づ れ 橋 と ち り 烏 の け づ け 夕 鳥  
ど こ 葉 好 が 延 け 何 雨 の 稻 枝 世  
り 胡 良 の け づ け 出 づ け 後 仗  
何 丁 の 夢 ち り 何 づ け 何 万 里  
い さ 赤 山 の 上 づ け 何 づ け 一 葉  
去 来

い づ 散 射 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
よ 散 射 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ず 散 射 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
る 散 射 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ぬ 散 射 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
切 や 散 射 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
中 の や 散 射 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
疑 の や 散 射 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち







竹の子 竹の子は折や一縷の指板が  
 瓜 香まよや瓜一巻の流 留  
 枝 枕花も折挿板あり瓜をけ  
 川 寄法橋の人敷きけよ冷瓜  
 社 和風の冷もひるる流板が  
 飛代 久しう折も休ませぬ流板が  
 石菖 何とれく流もたへて流板の日  
 初菖 人さうてさう流も川 社  
 枝 流も何もろりぬち流板が  
 石菖 形代も年々流もせぬ流板が  
 初菖 かまろやまんと流も流板が  
 枝 石菖やゆして折けハ折板が  
 初菖 初物の折瓜をれく流板が  
 枝 燕も初物とある折板が  
 枝 折のやうに折板が

竹の子 山月  
 瓜 山月  
 枝 山月  
 川 山月  
 社 山月  
 飛代 山月  
 石菖 山月  
 初菖 山月  
 枝 山月

竹の子 山月  
 瓜 山月  
 枝 山月  
 川 山月  
 社 山月  
 飛代 山月  
 石菖 山月  
 初菖 山月  
 枝 山月

竹の子 山月  
 瓜 山月  
 枝 山月  
 川 山月  
 社 山月  
 飛代 山月  
 石菖 山月  
 初菖 山月  
 枝 山月

竹の子 山月  
 瓜 山月  
 枝 山月  
 川 山月  
 社 山月  
 飛代 山月  
 石菖 山月  
 初菖 山月  
 枝 山月

竹の子 山月  
 瓜 山月  
 枝 山月  
 川 山月  
 社 山月  
 飛代 山月  
 石菖 山月  
 初菖 山月  
 枝 山月











秋の聲 一ツも傳へず秋のちるるは  
日也りのかゝる新や西ヶ原  
日也りのせりも藤原のさゝかひ

秋海棠 心て知れ秋海棠の花の色  
葉のさへも色をよれとてさうさ  
葉のさへも色をよれとてさうさ

草 草花のあふけちるとはさうさ  
草花のあふけちるとはさうさ  
草花のあふけちるとはさうさ

秋風 秋の風葉一とんの入りさ  
秋の風葉一とんの入りさ  
秋の風葉一とんの入りさ

古々や秋のちるるは  
古々や秋のちるるは  
古々や秋のちるるは

桐 桐の葉や何れもさうさ  
桐の葉や何れもさうさ  
桐の葉や何れもさうさ

松虫 松虫のさうさ  
松虫のさうさ  
松虫のさうさ

芭蕉 芭蕉のさうさ  
芭蕉のさうさ  
芭蕉のさうさ

風仙花 風仙花のさうさ  
風仙花のさうさ  
風仙花のさうさ

麻 麻のさうさ  
麻のさうさ  
麻のさうさ

菅 菅のさうさ  
菅のさうさ  
菅のさうさ

系瓜 系瓜のさうさ  
系瓜のさうさ  
系瓜のさうさ

角を、鹿ありて山やといふ  
角を、鹿ありて山やといふ  
角を、鹿ありて山やといふ

このかしの一日  
このかしの一日  
このかしの一日

秋の風葉一とんの入りさ  
秋の風葉一とんの入りさ  
秋の風葉一とんの入りさ

古々や秋のちるるは  
古々や秋のちるるは  
古々や秋のちるるは

桐の葉や何れもさうさ  
桐の葉や何れもさうさ  
桐の葉や何れもさうさ

松虫のさうさ  
松虫のさうさ  
松虫のさうさ

芭蕉のさうさ  
芭蕉のさうさ  
芭蕉のさうさ

風仙花のさうさ  
風仙花のさうさ  
風仙花のさうさ

麻のさうさ  
麻のさうさ  
麻のさうさ

菅のさうさ  
菅のさうさ  
菅のさうさ

系瓜のさうさ  
系瓜のさうさ  
系瓜のさうさ

秋の聲 一ツも傳へず秋のちるるは  
秋の聲 一ツも傳へず秋のちるるは  
秋の聲 一ツも傳へず秋のちるるは

日也りのかゝる新や西ヶ原  
日也りのかゝる新や西ヶ原  
日也りのかゝる新や西ヶ原

心て知れ秋海棠の花の色  
心て知れ秋海棠の花の色  
心て知れ秋海棠の花の色

瑞燕

一紫

新米

新米

贈

瑞燕の面影は遠くや能く  
 千年来の尾流は遠くや能く  
 新米の味も遠くや能く  
 瑞燕の面影は遠くや能く  
 千年来の尾流は遠くや能く  
 新米の味も遠くや能く

瑞燕の面影は遠くや能く  
 千年来の尾流は遠くや能く  
 新米の味も遠くや能く  
 瑞燕の面影は遠くや能く  
 千年来の尾流は遠くや能く  
 新米の味も遠くや能く

瑞燕の面影は遠くや能く  
 千年来の尾流は遠くや能く  
 新米の味も遠くや能く

瑞燕の面影は遠くや能く  
 千年来の尾流は遠くや能く  
 新米の味も遠くや能く

神祇之詞

大嘗會「新嘗會」○宮居  
 「鳥居」  
 「玉垣」  
 「駒犬」  
 「拜殿」  
 「称宜」

御湯立 ○拍當手  
 御瀾 ○御贖物  
 御杖 ○御杖  
 御樂 ○御樂  
 御取 ○御取  
 御慮 ○御慮  
 御言文 ○御言文  
 起請 ○起請  
 氏神 ○氏神  
 打火 ○打火  
 切火鎮 ○切火鎮



烟丈ひびく一京や居るお  
 白玄 燭面  
 抑く道より子持あしむるお  
 燭風 燭風  
 澄白あしや控一京も同者  
 燭風 燭風  
 子持やうちをさるる日 一日  
 燭風 燭風  
 阿多こちのせやまらるる日  
 燭風 燭風  
 有多き年よ唱るお  
 燭風 燭風  
 起この境や阿ちを愛唱る  
 燭風 燭風  
 阿多とて新あしむるお  
 燭風 燭風  
 うんまあかの山やせはの  
 燭風 燭風  
 山里や本の山をさるる  
 燭風 燭風  
 いまうき旅といふるお  
 燭風 燭風  
 阿多は阿多の阿ちを  
 燭風 燭風  
 川阿ちの山や阿多の  
 燭風 燭風  
 阿多も阿多の世あり  
 燭風 燭風  
 阿多も阿多の世あり  
 燭風 燭風

守〇三寸洗米〇繪馬〇矢鏑馬 放生會  
 岩船穗屋作神おろし舟玉金  
 〇常陸帶〇東遊乙女子〇伊勢講〇初午  
 〇小忌衣〇庚申待月待日まち  
 遷宮 非神祇詞  
 元方〇年徳〇男山〇佐保姫 竜田姫橋姫  
 竜神 竜宮〇放生川〇執火〇山伏〇榊  
 上巳の稜

初月 余のちよよ秋まぬ阿多の  
 山 山  
 〇月や子持をさるる  
 山 山  
 阿多は阿多の阿ちを  
 山 山  
 川阿ちの山や阿多の  
 山 山  
 阿多も阿多の世あり  
 山 山  
 阿多も阿多の世あり  
 山 山

尺敷の詞 佛像。木像。座像。立像。元祖。開山  
 〇門跡〇院家〇國師〇僧祿〇禪師 律  
 師 長老 上人 和尚 西堂 東堂 首座  
 藏主 典主 書記 行堂 僧正 僧都 法印  
 法眼 法橋 阿闍梨 檢校 法師 法躰  
 禪門 入道 叢心 新叢意 坊官 比呂尼  
 厩 坊主 坊 宿坊 〇碩学 〇僧 老  
 若僧。福僧。か只僧。若僧 出家 沙門 衆門 釈  
 小僧。客僧。薦僧





月 出づれば秋も定まる候哉  
 月もよみは田中の新植所  
 出づれば秋も定まる候哉  
 月もよみは田中の新植所  
 出づれば秋も定まる候哉  
 月もよみは田中の新植所

名月 名月や山と誰れ人の上  
 名月や山と誰れ人の上  
 名月や山と誰れ人の上  
 名月や山と誰れ人の上

月 月之夜 笑ひあふまやや南條の月  
 月之夜 笑ひあふまやや南條の月  
 月之夜 笑ひあふまやや南條の月  
 月之夜 笑ひあふまやや南條の月

二道くへる 花のあはれたる物に類する  
 二道くへる 花のあはれたる物に類する  
 二道くへる 花のあはれたる物に類する  
 二道くへる 花のあはれたる物に類する

ねまき衣 ちぎる名のちり  
 ねまき衣 ちぎる名のちり  
 ねまき衣 ちぎる名のちり  
 ねまき衣 ちぎる名のちり

後朝 〇内らむ垣 山城集雀あり  
 後朝 〇内らむ垣 山城集雀あり  
 後朝 〇内らむ垣 山城集雀あり  
 後朝 〇内らむ垣 山城集雀あり

錦木 昔は愛する女の名  
 錦木 昔は愛する女の名  
 錦木 昔は愛する女の名  
 錦木 昔は愛する女の名

伊達 上のおれど 春心 惚る 色情 拙京  
 伊達 上のおれど 春心 惚る 色情 拙京  
 伊達 上のおれど 春心 惚る 色情 拙京  
 伊達 上のおれど 春心 惚る 色情 拙京

月 月之夜 笑ひあふまやや南條の月  
 月之夜 笑ひあふまやや南條の月  
 月之夜 笑ひあふまやや南條の月  
 月之夜 笑ひあふまやや南條の月

名月 名月や山と誰れ人の上  
 名月や山と誰れ人の上  
 名月や山と誰れ人の上  
 名月や山と誰れ人の上

月 月之夜 笑ひあふまやや南條の月  
 月之夜 笑ひあふまやや南條の月  
 月之夜 笑ひあふまやや南條の月  
 月之夜 笑ひあふまやや南條の月

末の松山浪こき 陸奥あり男女  
 末の松山浪こき 陸奥あり男女  
 末の松山浪こき 陸奥あり男女  
 末の松山浪こき 陸奥あり男女

望夫石 昔は女ありその夫役は後ひくま  
 望夫石 昔は女ありその夫役は後ひくま  
 望夫石 昔は女ありその夫役は後ひくま  
 望夫石 昔は女ありその夫役は後ひくま

領巾 麻毛 犯すお松浦ありあり  
 領巾 麻毛 犯すお松浦ありあり  
 領巾 麻毛 犯すお松浦ありあり  
 領巾 麻毛 犯すお松浦ありあり

石心風 古傳ふる氏の女姫して太郎の婦とある  
 石心風 古傳ふる氏の女姫して太郎の婦とある  
 石心風 古傳ふる氏の女姫して太郎の婦とある  
 石心風 古傳ふる氏の女姫して太郎の婦とある

手児名 〇夫 〇夫婦  
 手児名 〇夫 〇夫婦  
 手児名 〇夫 〇夫婦  
 手児名 〇夫 〇夫婦



















舟橋たけ代綱たけ釣たけ清水たけ鏡たけ關たけ伽たけ氷  
 柱たけ○温泉たけ塩たけ燒たけ浮たけ木たけ釣たけ瓶たけ下たけ桶たけ浮  
 桶たけ蛸たけ壺たけ海たけ士たけ猩たけ々たけ和たけ布たけのたけ類たけ○龜たけ水  
 鷄たけ守たけ宮たけ水たけ鳥たけ千たけ鳥たけ都たけ鳥たけ鳩たけ鳩たけ  
 松たけ澡たけ住たけ虫たけ魚たけ鱗たけのたけ類たけ○橋たけ姫たけ夏たけ神  
 樂たけ放たけ生たけ會たけ○御たけ稜たけ○月たけのたけ氷たけ  
 月たけのたけ出たけ一たけ海たけ○漂たけ漂たけ○漂たけ漂たけ○水たけ屑たけ蛇たけ籠たけ  
 ○藻たけ蓮たけ芦たけ濱たけ萩たけ杜たけ若たけ菖たけ蒲たけ○あ  
 水たけ仙たけ茶たけ花たけ風たけ吹たけ腹たけ

酒たけ代たけ風たけ吹たけ腹たけ水たけ仙たけ茶たけ花たけ風たけ吹たけ腹たけ  
 舟橋たけ代綱たけ釣たけ清水たけ鏡たけ關たけ伽たけ氷  
 柱たけ○温泉たけ塩たけ燒たけ浮たけ木たけ釣たけ瓶たけ下たけ桶たけ浮  
 桶たけ蛸たけ壺たけ海たけ士たけ猩たけ々たけ和たけ布たけのたけ類たけ○龜たけ水  
 鷄たけ守たけ宮たけ水たけ鳥たけ千たけ鳥たけ都たけ鳥たけ鳩たけ鳩たけ  
 松たけ澡たけ住たけ虫たけ魚たけ鱗たけのたけ類たけ○橋たけ姫たけ夏たけ神  
 樂たけ放たけ生たけ會たけ○御たけ稜たけ○月たけのたけ氷たけ  
 月たけのたけ出たけ一たけ海たけ○漂たけ漂たけ○漂たけ漂たけ○水たけ屑たけ蛇たけ籠たけ  
 ○藻たけ蓮たけ芦たけ濱たけ萩たけ杜たけ若たけ菖たけ蒲たけ○あ

舟橋たけ代綱たけ釣たけ清水たけ鏡たけ關たけ伽たけ氷  
 柱たけ○温泉たけ塩たけ燒たけ浮たけ木たけ釣たけ瓶たけ下たけ桶たけ浮  
 桶たけ蛸たけ壺たけ海たけ士たけ猩たけ々たけ和たけ布たけのたけ類たけ○龜たけ水  
 鷄たけ守たけ宮たけ水たけ鳥たけ千たけ鳥たけ都たけ鳥たけ鳩たけ鳩たけ  
 松たけ澡たけ住たけ虫たけ魚たけ鱗たけのたけ類たけ○橋たけ姫たけ夏たけ神  
 樂たけ放たけ生たけ會たけ○御たけ稜たけ○月たけのたけ氷たけ  
 月たけのたけ出たけ一たけ海たけ○漂たけ漂たけ○漂たけ漂たけ○水たけ屑たけ蛇たけ籠たけ  
 ○藻たけ蓮たけ芦たけ濱たけ萩たけ杜たけ若たけ菖たけ蒲たけ○あ

真たけ薦たけ花たけ萍たけ菱たけ流たけ木たけ○冰たけ魚たけ田たけ井たけ栗  
 漬たけ龜たけ井たけ○里たけのたけ蜚たけ水たけ主たけ灣たけ築たけ住  
 吉たけ神たけ三たけ井たけ寺たけ清たけ見たけ寺たけ志たけ加たけ具たけのたけ松  
 天たけ津たけ明たけ石たけ栗たけ津たけ湏たけ廣たけ松たけ島たけ三  
 島たけ小たけ島たけ難たけ波たけ津たけ浦たけあるたけ園たけ八  
 瀨たけ濱たけ木たけ綿たけ非たけ水たけ辺たけ詞たけ難たけ波たけ寺たけ志たけ賀  
 住たけ吉たけ大たけ井たけ栗たけのたけ原たけ天たけのたけうたけたたけ橋たけ泪  
 川たけつたけせたけ川たけ夢たけのたけうたけたたけ橋たけ高たけ津たけのたけ宮





糸切りのいとよほ出す  
夏利の秋と時をまきまき  
日産改乃よいとよほ出す  
肉とを吳墨墨の縁際し  
廊の風とをふ涼しい  
夏利の糸切りのいとよほ出す  
煙草吸わぬを合意せしむ  
たきよはれよとて理ふはむ  
ありしのありとてむとてむ  
午時よはに折れたやうに板を食  
轉轉の強乃をたむとてむ  
花もあつたよとて入ふとてむ  
尾よとて折るよとてむとてむ  
浦先へまよとて折るよとてむ  
夜よとて折るよとてむとてむ  
花月、集てまよのほほと

花屋上りも人よとてむ  
深日初て有のよとてむとてむ  
さし候切て滴すよとてむ  
西の癖き思毒も七文板を食  
古袋よとてむとてむとてむ  
花もあつたよとてむとてむ  
花月、集てまよのほほと

蟾「かほら男」常娥「嫦娥」  
待宵の影「いごよひ」有明「さくらら男」  
冬の月「寒月」さむる月「月の氷」  
雑の月「心の月」胸の月  
夏の正花「余花」岩葉の花  
花小杜鹃「さくさく」  
秋の正花「花火」花相撲  
燈籠「夜ふか」

冬の正花「帰花」餅花  
雑の正花「作り花」繪の花  
花形「鼓」花塗「花かいら」  
茶の花「茶の花香」花子の狂言  
燈火「燈火」花鱈「花毛氈」  
花延「花延」詞の花  
声の花「花やう」



茶の葉はゆきと和洲をうらハ秋葉の  
詞多る故に正花とともしハ深あり  
「花紅葉」雪月花  
雪月花ハ月花の生を指べ一雜之也  
季並るハ雜之互ハあしき茶相されハあり

「花實」  
上 月

「非季の詞」  
。葉古の秋。雪山。雷。雷。放生川。橋の秋。櫻人  
。椎の木。橋の水。橋の浦。はるふ田。橋川  
伊勢人近江人などいふこと

「諏訪祭」  
此祭年々七十余あり。茶摘川。鹿毛の草  
。むくはき。橋の葉。忘れ。鹿毛の草

「黒牡丹」  
劉訓ケ古事  
牛の異名也

「去嫌」月「松」竹田「夢」淚「枕」衣「船」烟  
五句去と  
「折」を嫌ふ物  
命ニ玉の

「稻妻」ニイホ  
「岩」イロ  
「妹脊」ニ支ぬ  
「妹」ケリ  
「春」の日ニ  
「鳥」鳥

「女の字」ニ女郎  
「雷鶴」の林ニ在り  
「馬駒」ニ後  
「研」ニ山  
「雷散」ニあり

表は秋秋を春と事秋秋を春と事  
ぬかりはまともぬかりはまとも  
月小日と星のり。有月星は月を合むる。異名の月はり。星は月星のり  
有四ヶ條立り抄末式よりしりしり  
追考云々文小所謂素秋をせぬるなりとハ本法ははまとも星の控根より月を合むる  
合ありて星の座より月と花を一句に結ぶるの法ありやうやく月を合むる  
素秋をいふも八月の季よりち也一ヶ月を伴秋は素秋をいふも八月の季よりち也  
秋の申すは八月の季よりち也一ヶ月を伴秋は素秋をいふも八月の季よりち也  
會式執事依紙の減やう結び目と上へ出さる一結方は倍  
下依紙減根ありは倍  
一文を左腕を宗匠の座より  
一文を左腕を宗匠の座より

批五

一文を左腕を宗匠の座より  
一文を左腕を宗匠の座より

一 執筆破る文主登の下右極は主筆也破れおふ事あり  
 一 吸出来文主登を立ぬぬ句を二反吃ト一順を吃ト一名も讀べ一名を讀む時連流を何れも自句のとき一様ある處一吃一終一極紙を文主登より附句品一句を讀吃ト上ト一  
 一 附句を吃ト一極紙をよみ終ト一むべ一  
 一 附句出たるときは他若執筆は向ひをよみを密中終りよみ之執筆又中終り一反吃ト一不直一吃ト一やうに讀まざるに生句を何少ト一不直ト一とありハ執筆極紙一書一打紙と生句を吃まべ一宗匠免ト一あり執筆生句を一反讀なり  
 一 連流席ふ是時一吃一極紙は是之用りよみ立ると一様ト一立陣ト一書度ト一様ト一元紙一極紙は是なり  
 一 執筆重の八句目ト一丹秋と形ト一書主秋と書ト一分仙りハ二一名折折の古句目人百餘ト一折三折の裏ト一むべト一  
 一 名残の裏の初句ト一書一吃と形ト一  
 一 酒度の上執筆ぬぬ句より一句つ讀べ一再び名を讀み及むる句を酒の句へうけて二反よむべ一長句を又七五と息を助けて吃まべ一終句を七と吃まべ一吐き終り一度免紙あるなり  
 但一順度付の時名を讀む時を満吃の上一吸の名とよむべ一けとき句毎の之一礼五反也

明治三十六年四月廿五日印刷  
 全 年 全 月三十日 発行

編輯者 伊藤新策  
 東京浅草須賀町二番地

發行兼 印刷者 松崎半造  
 全市全町十九番地

發賣所 末古堂書店  
 全 所

